

会議名	第2回 台東区立図書館に関する意見交換会	開催日	令和元年12月17日(火)
		時間	午後7時～8時30分
		場所	台東区生涯学習センター 5階504教育研修室
出席者	大串夏身委員長（昭和女子大学名誉教授） 野末俊比古副委員長（青山学院大学教授） 佐藤薫委員（公募区民） 川田善男委員（台東区立富士小学校長） 瀬川眞也委員（台東区立駒形中学校長） 酒井まり委員（台東区教育委員会事務局次長）		
配布資料	<ul style="list-style-type: none"> ・台東区子供読書活動推進計画（第四期）中間のまとめ ・令和元年度図書館の利用に関するアンケート集計表 ・台東区の図書館（平成30年度事業報告） 		
内容	<p>1. 開会</p> <p>2. 挨拶 大串委員長</p> <p>3. 議事 （1）台東区子供読書活動推進計画（第四期）中間のまとめについて</p> <p>○台東区子供読書活動推進計画（第四期）中間のまとめ第1章から第4章について、事務局から説明。</p> <p>[委員長] ただ今の説明について、質問・意見を聞かせてほしい。</p> <p>[委員長] 台東区の場合、「台東区の図書館」の統計を見ると、比較的蔵書構成がよく、分野ごとの蔵書冊数のバランスがとれている。文学が2～3割程度で、偏りがなく、非常にいい蔵書構成でサービスをしているので、このまま積極的な取組を進めていけば、計画の指標をクリアできるのではないかと思う。 子供達の不読率については難しい問題である。不読率については社会的な背景もあり、子供の貧困などの問題を文部科学省も指摘しており、公共図書館にもそういった点で取組を進めて欲しいと述べていた。 大人への読書の働きかけも重要で、フランスでは子供が本を読まないのは大人が本を読まないからということで、国立図書館が市町村立図書館に本を貸出し、市町村立図書館で大人に本を読ませる取組をしている。日本では大人が本を読まないのが、比較的問題である。</p> <p>[委員] 不読率について、9頁（2）の「区立小学校区立中学校の児童・生徒不読率」の現状値は学校以外で読んだ本という捉え方でよいのか。学校では週1回、図書的时间などで本を読んでいる。</p>		

内 容	<p>[事務局] 設問としては、「1か月に1冊も本を読まなかった」というものだが、内容を見るとそういう捉え方だと考えている。</p> <p>[委員] 目標値の数値が細かく設定されているが、どのように設定したのか。</p> <p>[事務局] 国が10年間で不読率の半減を掲げている。区の計画期間が5か年計画なので25%減らすということで設定した。実際は各学年・クラスにより上下するため、あくまで目安として設定した。今後どのような動きをしていくのか注視していく。</p> <p>[委員長] 登録者数はどうか。自治体によっては、1年生は全員登録させるなどしているが、台東区でも行っているのか。</p> <p>[事務局] 利用登録については、全生徒に依頼はしていないが、学校と連携して、図書館見学などのイベントは行っている。 また、小学校新1年生全員に「としょかんへいこう」というリーフレットを作成し、学校での配布を依頼している。</p> <p>[委員長] 来年度からタブレットを全員に持たせるのか。</p> <p>[委員] 台東区の場合は、全員ではなく、3人に1台の割合で進めている。国が補助金の補正予算を組んだが、それを実際にどのように活用できるかは、まだ把握できていない。</p> <p>○台東区子供読書活動推進計画（第四期）中間のまとめ第5章から第6章について、事務局から説明。</p> <p>[委員長] ただ今の説明について、質問・意見を聞かせてほしい。</p> <p>[副委員長] 「子供」の定義がどこまでなのか確認したい。小学生から中学生までを対象とし、高校生は対象にしていないのか。そこがぼやけると、全体として施策がぼやけてしまう。読書教育は、発達段階に応じた対応が非常に重要である。 中高生の読書率が下がるのは、忙しくなるから致し方ない面もあるが、就学前の段階で読書経験があると、中学生・高校生で下がっても、大学生になれば、ある程度戻ってくるという調査もある。就学前の読書が大事であり、読む読書というよりは、読み聞かせなど聞く読書が身の回りにあることも大事になる。発達段階に応じてどう指導していくかが大事である。</p> <p>[事務局] 計画の対象は18歳未満である。統計データを15歳までとしているのは、年齢データの統計を15歳までしか取っていなかったためであり、実際には、高校生も対象にしている。乳幼児段階からの読書として、小さいころに誰かに本を読んでもらったという子供は、明らかに読書経験がついている。今回の計画では、まずその段階からとして新規事業を設定した。</p>
--------	---

[副委員長]

児童関連図書とはどこまで指すのか。

[事務局]

児童関連図書は、絵本・児童書等、こどもとしょしつのほか、グリーンコーナーにある青少年図書も指している。なお、中高生向けの図書であっても、一般書として分類しているものもあり、そちらは含んでいない。

[委員長]

ある区の中学校の先生の会議では、公共図書館は、中学生向けの図書だけでなく、高校生向け・児童向け、大人の本等もあるので、広がりがあるという点がよいと述べていた。

[副委員長]

デジタルのものはどうするのか。今はデジタル教科書も認められている。新規事業を行う中で、紙にこだわりすぎない方が不読率を下げる点では、効果的なのではないか。タブレットでの読書もあってよい。読書の入口にもなる。事業の中で紙というものに過度にこだわらない方が結果として読書の幅を広げる。

読書のイメージが狭くなってしまっている。実際今の子供達が活字を読まないわけではなく、ネットの文章や勉強の本などは読んでいる。調べるための読書もしている。実際のところ、読書率が下がっているとは思っていない。媒体・目的・ジャンルが変わっているに過ぎない。

[委員]

対象年齢の話から、読み聞かせ等の機会を逃してしまった子供達が気がかりである。あまり読書したことがない人へ、読書がいかに関心を持ってもらえる、きっかけづくりがあるとよい。紙にこだわるだけではなく、オーディオブックや紙芝居など媒体は色々ある。工夫して、読書の楽しさを大きくした子供にも教えてあげられたらよいのではないかな。

[委員長]

日本では小学生だけだが、ヨーロッパでは中学生にも読み聞かせをしている。ヨーロッパやアメリカでは演説の授業があるなど朗読がさかんである。日本の読書は範囲が狭い。

大学院生の調査では、質問項目の「デジタル絵本・携帯小説」等も読むことと考えられている。NHKの生活習慣調査では、「本を読む」という項目をやめた。それは、子供達の中に本という概念がなく、活字を読むことが「本を読む」概念になっており、中身が違ってきってしまうので、やめたということ。東大の秋田先生によると、高校の読書について、学校での取組によって読書率が全然違い、学校での取組の差が顕著に表れる。学校での取組が重要である。

[委員]

私の小学校では6年生が1年生に定期的に読み聞かせをしている。他の学校もその学校ならではの取り組みをしているとは思いますが、なかなか共有されない。以前自分がいた学校では、読書部・図書館部があり、区内の先生が集まって実践事例を共有している。計画での事業NO35*のように各学校でもう少し事例の紹介や共有する機会があると、NO27・28*のようなことが具体的にできるのではないかな。各校に読書指導の担当はいるが、各校の取組を知る場がない。担当者が情報共有し、魅力ある読書活動の推進につなげていければよいのではないかな。全校に配置している司書を積極的に活用して、読書活動への取組を紹介・共有できればよいのではないかな。

※事業NO35…学校図書館運営の専門性向上に向けた研修会・連絡会議

※事業NO27…各学校における魅力ある読書活動の推進 事業NO28…読書への興味・関心の喚起

[委員長]

江戸川区では、地元の書店商組合と協力して、ブックフェアをやっており、保護者の方に関心を持っていただくのは、実際の本を見てもらうのが一番よい、ブックフェアをやってみるのもよいのではないかな。

[副委員長]

調布市では、図書館で作成したおすすめリストをある書店で揃えて販売していた。

[委員長]

地元の商店街で売っているものを図書館で本を揃えて、商店街に持っていき紹介するなど街ぐるみで行っている。熊本の書店商組合では、図書館の本を紹介するなど図書館も協力して行ったことがある。山梨県でもおすすめ本のコンテストで行ったものを販売するなどをしている。そういったことも考えてもよいのではないか。

[副委員長]

聞く読書・見る読書・触る読書、色々な読書があり、読むだけが読書ではない。新聞・雑誌・漫画も読書であり、子供たちに多様なジャンルを認めてあげたほうがよいのではないか。

読書の目的は、教養のための読書だけではなく、調べるための読書、勉強のための読書、楽しむための読書、趣味の読書、色々な読書があってよいことを子供達に伝えていくのがよい。読書教育は、読書能力を身に着けることが目的。読むべきときに読むことができる経験を積むことが大事。色々なことをバランス良く行っていくことが重要。小さい頃に読書の経験がない子供は中学・高校・大学で引き上げるしかない。中学・高校・大学、どこかの段階で引き上げてあげられるような機会を設けるべきだ。

[委員長]

最近の読書の研究では、4・5歳児の時期が非常に重要であり、生涯に渡る学習意欲の基礎を作る。書くということは、いろいろ調べて、体験したり、イメージを膨らませたりなど色々なことを行っている。読むということは、調べる、経験する、創造するなど人間的な行為に関係をもっているということは、勧める側も見ておかなければならない。

本の中身は物語だけじゃなく、ドキュメントなど色々なものがある。東大の先生方は「理科読」という理科に関する本の読み方を子供達に教えている。理科だけでなく様々な事実について読み方を大人が子供たちに教える。社会的な問題は子供たちが関心を持たないから、大人がフォローして読み方を子供たちに伝える。

[事務局]

手足が不自由な方などに対しては、朗読CDも1つの方向性とも考えている。

マルチメディアデイジー※は、今年から行っているが、原則として著作権がフリーではないものなので、障害者などの方限定になる。それ以外の動画などについては、普及状況など動向を見ている。

※マルチメディアDAISY図書…音声と一緒に文章や画像が表示されるデジタル図書

[副委員長]

最近の学生はテレビを見ない。YouTubeなど、インターネットで動画を見る。同様に、「note」（文章を書いて記事を残すサービス、一部有料）で好きな書き手の文章を読むなど、紙の本を買わない傾向も見られる。読書の考え方が変わっており、多様性を認めてあげると苦手な読書というのも変わる。

[委員長]

読み方が変わってきている。印刷物で読んでいた時は書込をしていたが、デジタルでは書込めない。文科省のデジタル教科書のモデル事業では、先生がタブレットとは別に自分のノートを作りなさいという。タブレット・デジタルにするとメモをとることがなくなってしまう。

(2) 令和元年度図書館の利用に関するアンケート調査結果について

○令和元年度図書館の利用に関するアンケート調査結果について、事務局から説明。

[委員長]

ただ今の説明について、質問・意見を聞かせてほしい。

[副委員長]

WEBアンケートは30代・40代が多く、ビジネスパーソンが多いと思われる。せっかくデータをとったので、年齢別に分析してみると面白いのではないか。区政サポーターは利用率が若干低いというのも、それはそれで1つ取り出して分析してみると、働きかけのヒントになるのではないか。

[事務局]

区政サポーターの方は、利用率が低かったので、どちらかというとな来館者の要望として分析できる。

[委員]

書籍消毒機はとてもいいと思う。これと並行して読書通帳の導入を考えてほしい。図書館に来ない人、本を読まない人が利用のきっかけになると思う。お薬手帳のようにシールを張るなど、インセンティブになるようなことをすれば、本を読む楽しさにつながる。導入について、検討していただきたい。

[委員長]

以前、文部科学省の調査で座長をやった際に、子供達から読書通帳の意見を聞いたことがある。自分が読んだという記録だけでなく、友達に本を紹介するのに、正確に書名が伝えられるし、聞いた方も正確に図書館ですぐ調べられ、その本について友達同士で話が弾む。

[事務局]

読書手帳については、「おくすり手帳」方式ならデータを図書館で持たないようにすることができる。

銀行の通帳方式だとずっと記録を残す必要があり、日本図書館協会はデータを持ち続けることは推奨しないともいっており、賛否両論ある。図書館としてデータを持ち続けることはどう思われるか。

[委員長]

貸出履歴は持たないほうがよい。図書館は住民主体であり、利用する方に記録が残ればよい。残したいって申し出があれば残すという図書館もあるらしいが、自分の責任でやるべきであり、記録は残さないのが原則である。

[事務局]

導入の是非を含め、今後のシステム改修の際に向け、検討していきたい。

[委員長]

今回はデジタルの関係について、聞いてはどうか。

[事務局]

電子書籍は本という意見もいただいたので、台東区としても考えていきたいと思う。
著作権等などの課題もあるので、引き続き研究する。

[委員長]

電子書籍は調べることに活用できる。読み物系より、辞書的なものが基本的にはよいのではないか。他にご意見がなければ、これで議事進行を終わりにしたい。

[事務局]

委員長ありがとうございました。以上をもちまして、会を終了させていただきます。

4. 閉会

以上

内
容